

市史だより

Gači が あ ま の あ あ

第5号・2005年6月30日(木)発行

年4回(5・8・11・2月発行)

問い合わせ・情報提供先

☎ * (* ☎ * ☎

☎ (098)893-4431

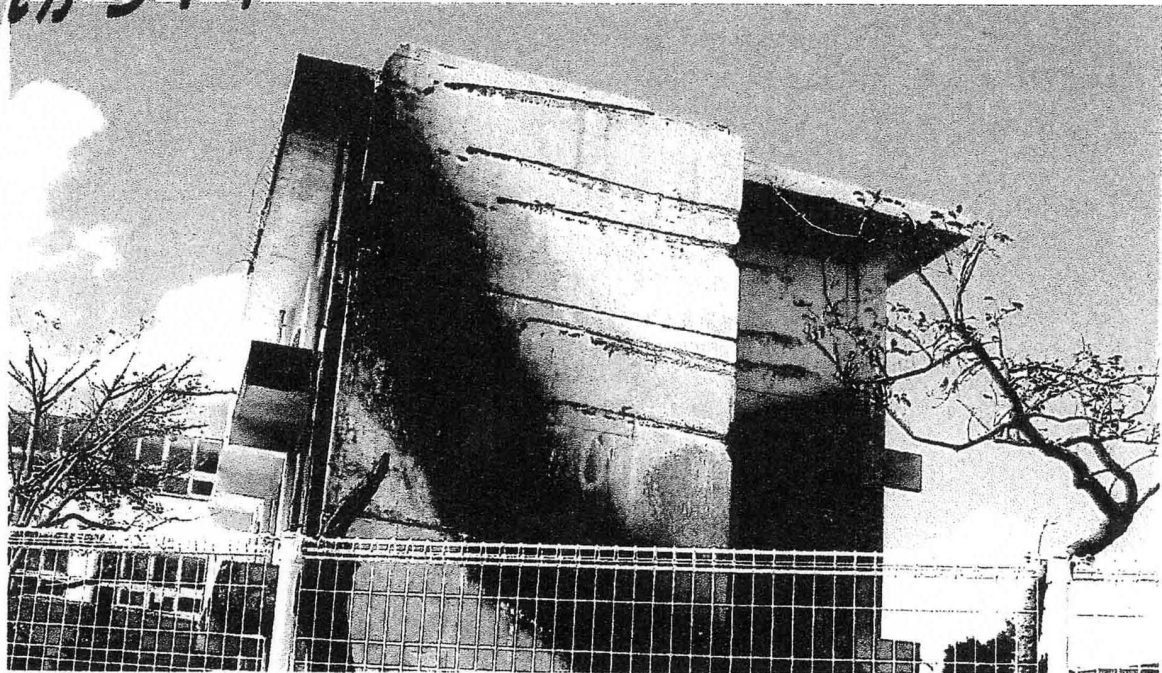
Fax (098)893-4434

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係

〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp

あれから1年...



2004(平成16)年撮影 沖国大の「黒い壁」

昨年8月13日、沖縄国際大学構内へ米軍ヘリが墜落炎上するという事件が発生しました。墜落現場からは夥しい量の黒煙が噴出しました。大学1号館の壁面は黒く帯状に煤がこびりつき、ヘリの回転翼は壁面に無数の傷を刻み込みました。沖縄大の「黒い壁」は、墜落現場一帯がまさに「戦場さながらの光景」であったことを伝えていました。

あの出来事から1年が経とうとしています。おりしも今年は「戦後60年」にあたります。「戦後60年」にあつて、今や「黒い壁」には撤去作業のための白いシートが被せられ、その1号館の上空には以前と変わらず米軍機が飛んでいます。そこには「戦後60年」の荒涼たる風景が広がっていました。

＊神様のお引っ越し＊

去る4月23日の土曜日に普天満宮では本殿の竣工に伴い、「せいせんざさい正遷座祭」という儀式が行われました。正遷座祭は普天満宮の本殿が1953(昭和28)年に建て替えられて以来、行われることのなかった52年ぶりの一大行事です。ここでは、本殿の完成から正遷座祭に至るまでの普天満宮の様子について紹介していきます。



戦後はいじめて神社の復旧にとりかかった普天満宮は、1953(昭和28)年に本殿の竣工に際して正遷座祭が執り行われました。その後、拝殿が建立され、1968(昭和43)年の神殿建立をもって再建事業を終えました。

再建事業の完了から40年が過ぎようとしています。普天満宮は老朽化によって、本殿と拝殿の建て替えが必要となり、2004(平成16)年4月から造営工事が始まりました。造営工事に向けて、2004(平成16)年4月3日に本殿内に安置されていたご神体を洞窟内の仮の本殿に移す仮遷座の儀式が行われました(写真1)。仮遷座とは、新しい本殿が完成するまでの間、仮の本殿に神様がお引っ越しされたと考えてよいでしょう。

拝殿は去年の12月には竣工し、初詣には多くの方が新しい拝殿を前にして、様々なことを願い祈ったことでしょう。その後、本殿の建て替え工事を終えた普天満宮では、2005(平成17)年4月23日(土)午後7時30分から遷座祭が執り行われました。今回の遷座祭は、洞窟内の仮殿に安置していたご神体を華々しく生まれ変わった本殿に移っていただく「正遷座祭」という儀式です。つまり、普天満宮の神様が新しい我が家へお引っ越しされたのだと捉えてよいでしょう。

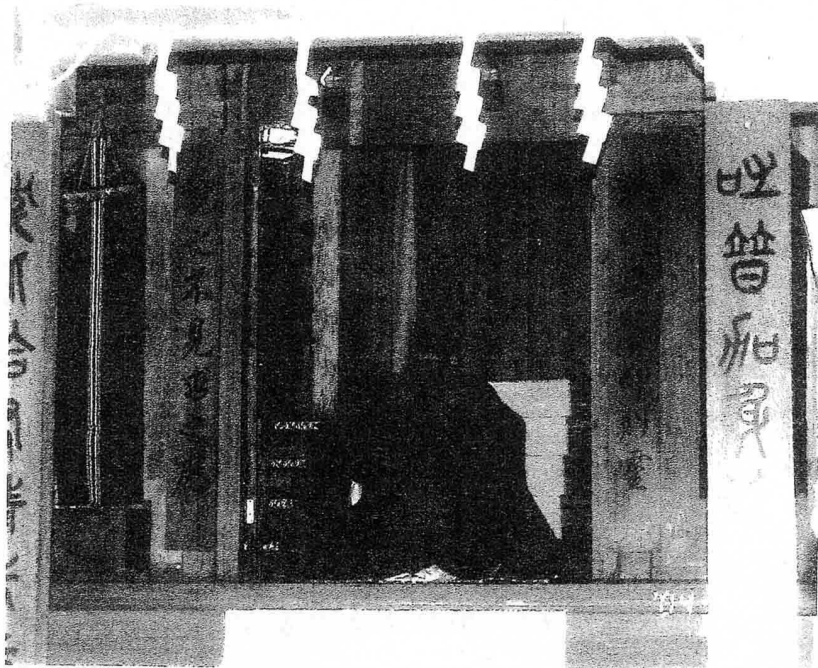


写真1. 仮殿へと移動する前の光景 ご神体を前に宮司は祝詞をあげる

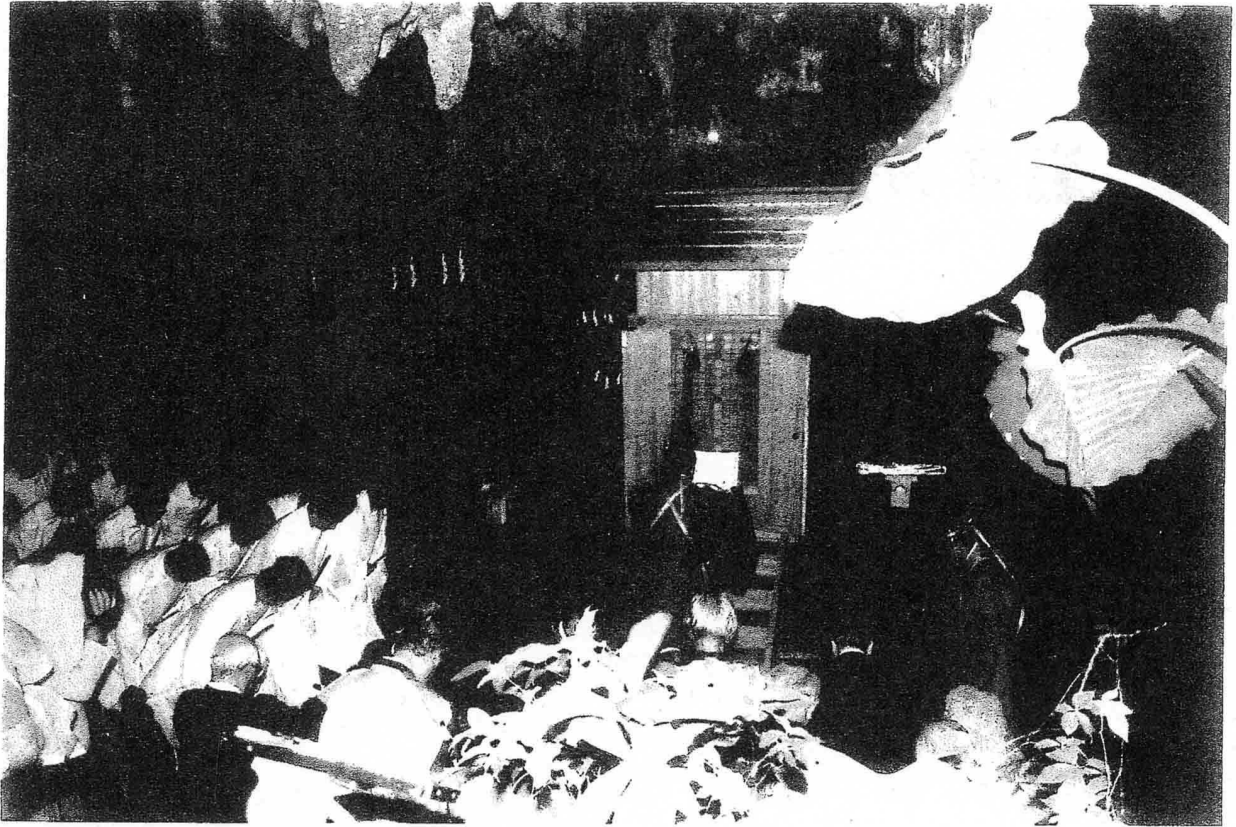


写真2. 洞窟内の仮殿前に神職らが整列し、祝詞をあげる宮司（中央）

儀式はまず、洞窟内に移動した宮司や神職らが仮殿の前に整列し、宮司が祝詞をあげ、仮殿に安置していたご神体を運び出しました（写真2）。

暗闇のなか、笛の音が鳴り響くと、松明たいまつに灯した光を頼りに、白い布で覆われたご神体は神職らの手によって、本殿までの道のりに敷かれた白い布の上を通り、移動して行きました（写真3）。

その様子はとても神秘的で神聖な空気が漂っていたように感じました。本殿にご神体が無事に遷うつされると、宮司は祝詞をあげ、玉串たまぐしや供物を捧げ、儀式は午後9時過ぎに終了しました。

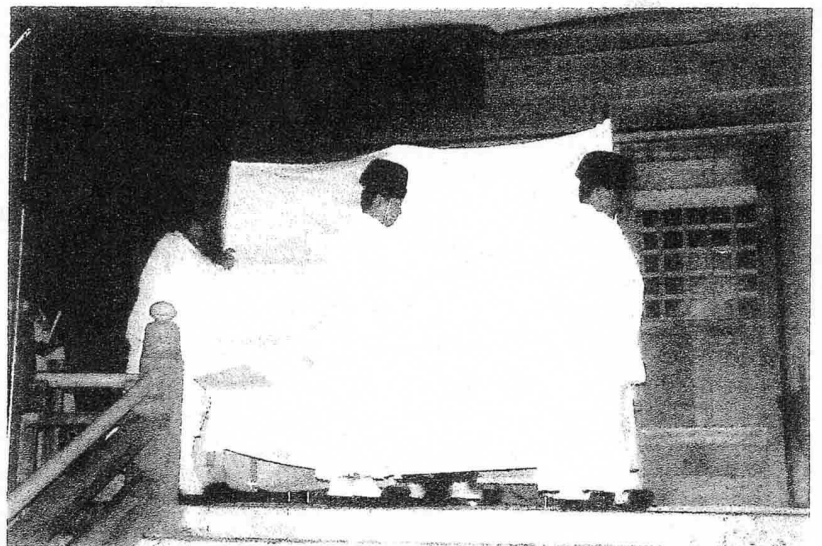


写真3. 本殿へと移動中のご神体

雨天であったにも関わらず、めったに立ち会うことの出来ない52年ぶりの正遷座祭には、多くの人びとがつめかけ、神様のお引越しを見届け、本殿の完成を祝いました。

● シリーズ歴史のあしあと



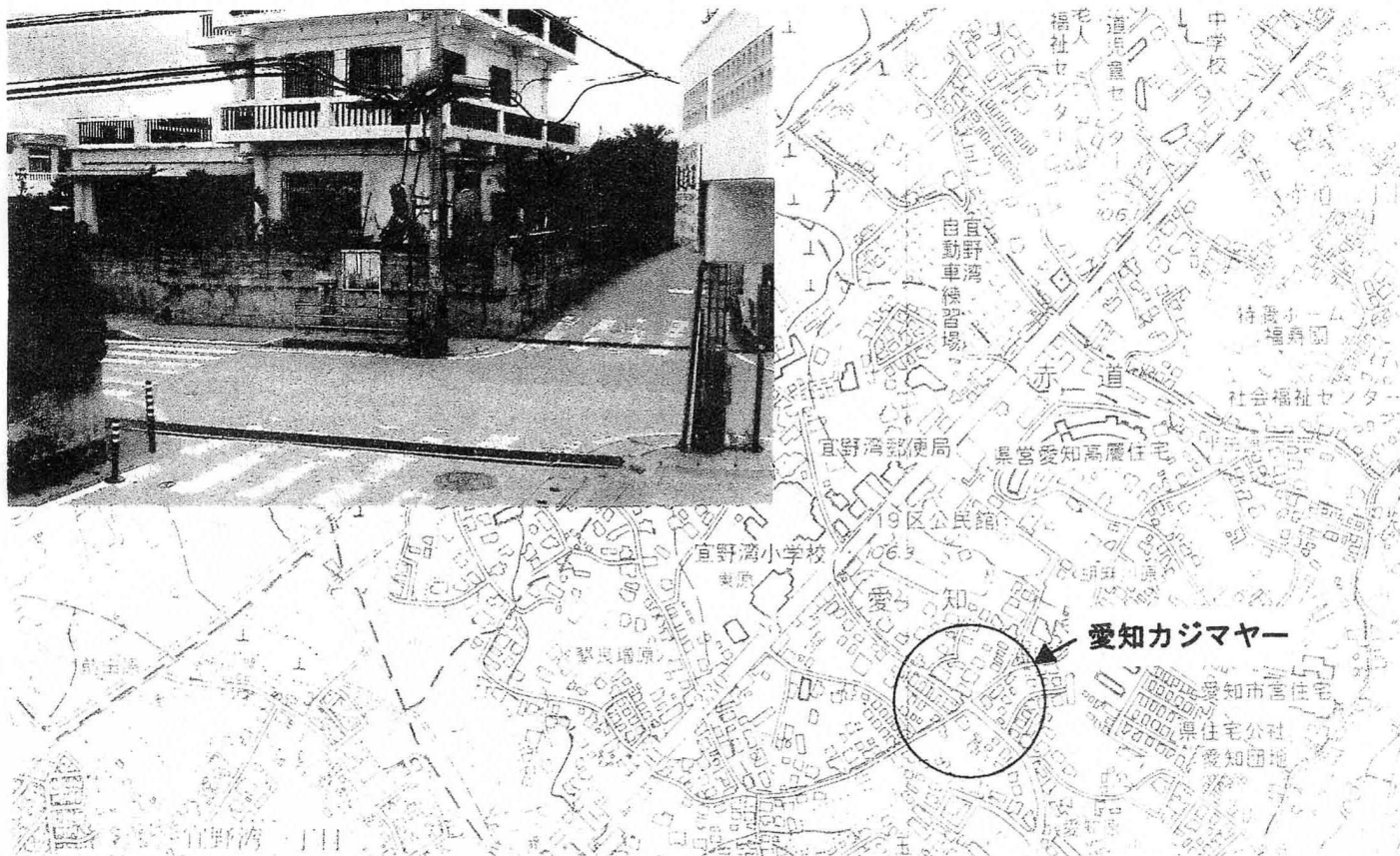
若者の交流の場、愛知カジマヤー

宜野湾市愛知は、1939（昭和14）年に行政区として設置された^{あざ}字です。戦後は、1963（昭和38）年に神山と合併して19区となりました。

現在の宜野湾小学校向かい、愛知交番から東の通りを行くと、右側の角に商店がある十字路に差し掛かります。そこは「愛知カジマヤー」と呼ばれる場所です。「カジマヤー」とは十字路や風車を表します。

この愛知カジマヤーの周辺は、現在では住宅が立ち並んでいますが、戦前は広い琉球松林に囲まれた広場でした。この一帯は^{マジリモウ}間切毛と呼ばれ、かつての琉球王府時代の名残を留める宜野湾間切有地でした。この広場には、夜になると男女の若者達が集まり、^{モウアシビ}毛遊びが行われていました。男性達は自身の力自慢にトーセー（倒せ）と呼ばれる、今で言うレスリングのようなものを興じるなど、交流の場所でもありました。

参考文献：仲松弥詳『ふるさと愛知』（1980）、『宜野湾市史』第5巻民俗（1985）



現在の愛知カジマヤー。住宅が立ち並び、間切毛の跡も人びとの記憶に残るのみとなった。

*今号から幅広く歴史の跡を紹介したいと思い、タイトルを「歴史の道」から「歴史のあしあと」に改めました。



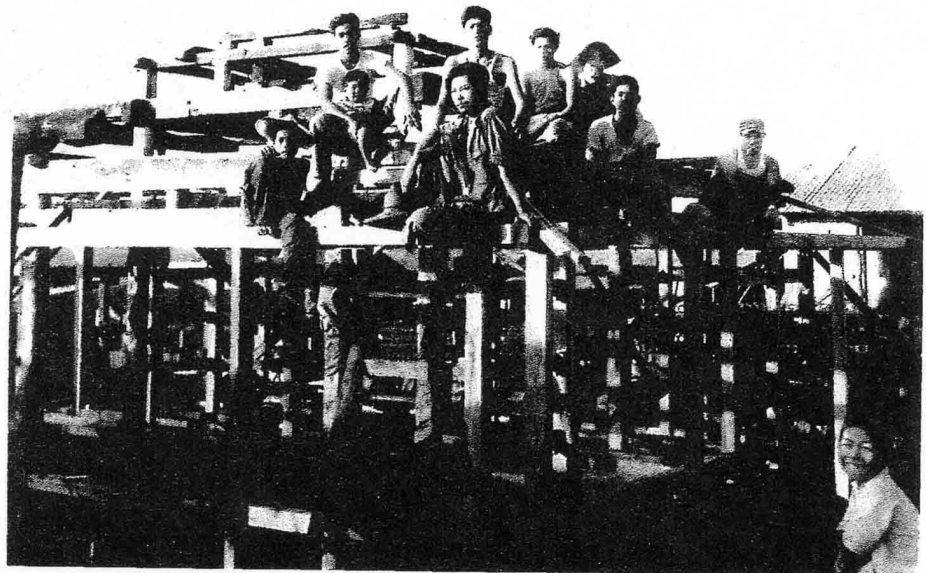
きかくやー
～「戦果」と規格家～

1946(昭和21)年8月、嘉数、我如古への移動許可が下り、1948(昭和23)年頃には、宜野湾村の字の多くが野嵩・普天間から分散して居住しました。しかし、前回でご紹介したとおり、宜野湾村の字の多くが、軍用地から弾き出されるように集落を形成していました。かつての故郷^{ふるさと}は米軍の基地や施設となり、人びとの目には、変わり果てた故郷の姿が映っていたことでしょう。そして、そこではさらなる困難が人びとを待ち受けていました。家を建てるための資材が不足していました。

当時の主な建築資材は、“ツー・バイ・フォー”と呼ばれる、2×4インチサイズ(約5センチ×10センチ)のアメリカ産の角材でした。ツー・バイ・フォーは村の役所から字ごとに配給され、人びとは配給されたツー・バイ・フォーを使って、家の骨組みを作りました。また、家の壁にはテントを代用し、屋根には茅^{かや}を葺きました。茅^{かや}は少年たちが原野から刈ってきたものでした。このように、人びとは互いに協力し、共同で作業して家を建てました。こうし

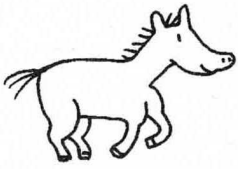
て建てられた家は“規格住宅”、あるいは“規格家”^{きかくやー}と呼ばれています(写真1)。

しかし、配給される木材だけでは、村民の需要を満たすことはできませんでした。アメリカ産のツー・バイ・フォーが配給される一方で、日本から無償で資材を獲得することを主張する者も現れました。また、宜野湾

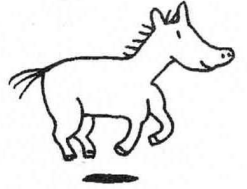


(写真1) 1949(昭和24)年頃・大山 共同作業で家を建てる

村役所では国頭地方まで出かけて、木材を切り出しました。しかし、日本からの資材の獲得は見通しが立たず、国頭地方まで切り出しに行った木材も、資材不足を解消するには至りませんでした。このように、依然として資材が不足するなかで、村民は資材探しに奔走^{ほんそう}しました。ある者は米軍のチリ捨場から廃材を拾い、ある者は軍作業のかたわらで資材を持ち出し、なかには米軍施設に入り込んで軍の資材を窃取する者まで現れました。

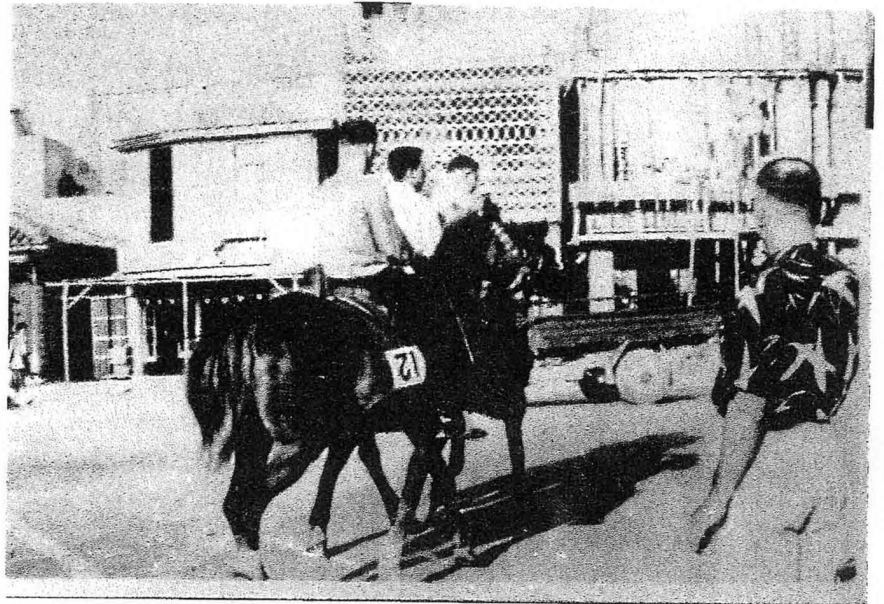


宜野湾の街を馬が疾走?!^{しっそう}



1966（昭和41）年6月の「市報宜野湾」に、「居住地域での乗馬は止めよう」という見出しの記事が掲載されています。宜野湾村内では貸馬業が営まれており、中でも普天間では1960（昭和35）年当時、貸し出し用の馬が約40頭もいたといえます。週末や祝日には、馬を借りた米兵が居住地域や道路を駆けぬけるなどして、住民からは不安や苦情の声があがっていました。

乗馬地域となっていたのは、普天間一～三区、新城区、野嵩一～三区で、店舗や住宅が密集し、往来も激しい地域であったことから、そこを馬が駆け抜けていくというのは、かなり危険であったことが想像できます。現実には、事故も多く、また、1965（昭和40）年には、正月を祝って掲げられていた日の丸の旗を疾走する馬上の米兵が引きちぎられるという出来事もあり、米兵の乗

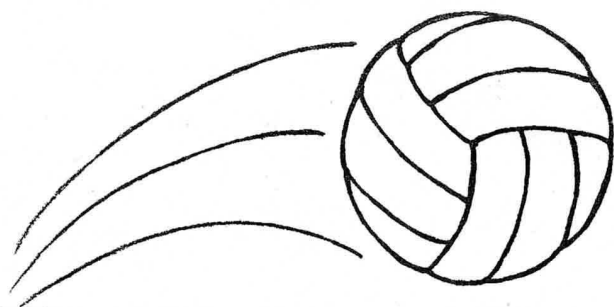
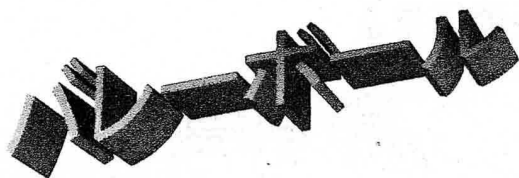


馬マナーの欠如は非難を集めていました。

1958（昭和33）年頃 普天間の貸し馬業

住民たちは、子どもたちを安心して外で遊ばせることができないことなどを訴え、取締まりを要請しましたが、復帰前の琉球政府の法令では、こういった行為を規制することができませんでした。そこで、琉米親善委員会（普天間マリン航空隊と宜野湾市とで設置した委員会）において、この問題を取り上げたところ、マリン隊側は隊員に対して乗馬についての注意を促すことを約束した他、琉球列島米陸軍規則の中の「乗馬に関する規則」を英文・和文両方で印刷したチラシ3千枚を、貸馬業者から馬の利用者に配布するようにと、市長宛てに送付してきました。

その後、これらの対策が、どれほどの効果をあげたのかについて、記事等を見つけることはできず、貸馬業がいつ頃まで続けられたのかについても知ることはできませんでした。巨人、大鵬が絶大な人気を誇っていた当時、沖縄で西部劇さながらに街で馬を走らせる米兵の姿が見られたというのは、まるで錯覚でも起こしたかのような、なんとも不思議な感覚におそわれます。



全日本 VS キューバ

a t. 宜野湾市立体育館 (真志喜)

みなさんは、宜野湾で男子バレーボールの全日本対キューバの試合が行われたことがあることを知っていますか？ 今から19年前の1986（昭和61）年6月29日、その日は、宜野湾市立体育館の落成式でもありました。この体育館の落成記念事業として、全日本対キューバという国際試合が開催されたのです。沖縄で国際試合が開かれたのは、これが初めてのことでした。

しかし、この沖縄での国際試合実現に至るまでには、大きな難題が立ちはだかっていたようです。当時、外務省は「キューバチームが沖縄入りすることは国益上、好ましくない」という立場を取っており、沖縄での開催は困難をきわめたといえます。開催の陰には、県内関係者の熱意と大きな尽力があったのです。

ホセ・アントニオ・ローハス監督率いるキューバ・ナショナルチームの一行18名は28日に沖縄入りし、関係者から歓迎を受けました。翌29日に宜野湾市立体育館で行われた試合には、4千人もの観客が押し寄せ、興奮の渦の中、白熱した試合が繰り広げられました。観客の熱気に後押しされるかのように全日本も善戦し、試合はフルセットまでもつれ込みましたが、8-15、15-4、15-9、14-16、15-3という結果で、残念ながら2対3で全日本が敗れました。ちなみに30日には奥武山体育館で、もう一試合が行われましたが、この日の試合は3対0のストレートでキューバが日本に圧勝。それをふまえると、宜野湾で行われた試合で、いかに全日本チームが奮闘したかが、うかがえますね。

みなさんも宜野湾市立体育館近隣に出向くことがあれば、体育館を眺めながら、当時の4千人の観客や、試合の熱気を思い描いてみて下さい。人々の歓声が聞こえてくるかもしれませんよ。

ちなみに…当時、キューバチームのキャプテンはラウル・ビルチェス、全日本チームのメンバーには大竹や蘆山がいました。スポーツ界を見渡してみると、サッカーではマラドーナ、陸上ではカール・ルイス、テニスではボリス・ベッカーが活躍、高校野球では四国・徳島県の池田高校が甲子園・春夏連覇を目指していました。

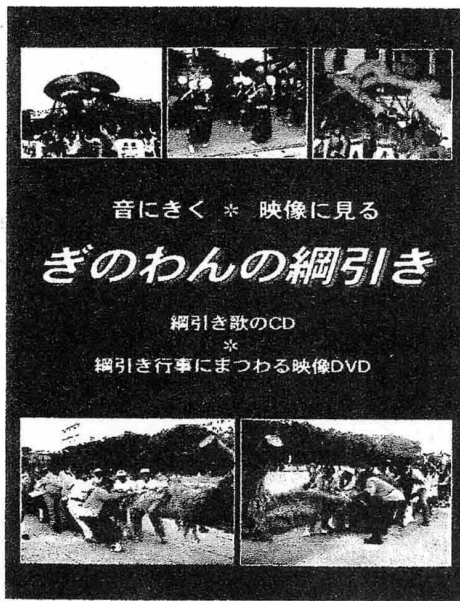
好評発売中!

音にきく * 映像に見る

ぎのわんの綱引き

綱引き歌のCD * 綱引き行事にまつわる映像DVD

今年も綱引きの季節が到来しました!
綱引き本番までは、CD・DVDでお楽しみください。



¥2,000 (税込み)

販売

教育委員会文化課 (市民会館内)

TEL 098-893-4431

宜野湾市立博物館 (森川公園隣)

TEL 098-870-9317

**DiscⅢ 音にきくぎのわんの綱引き
《CD》**

| | | |
|-----|-----|-----|
| 大 山 | 真志喜 | 宇地泊 |
| 大謝名 | 嘉 数 | 宜野湾 |
| 我如古 | 野 嵩 | 新 城 |

Total: 34:00

**DiscⅣ 映像にみるぎのわんの綱引き
《DVD》**

綱引きの歴史
現在の綱引き
大山の綱引き／真志喜の綱引き
野嵩のちなひちもうい
写真・映像資料

♪ 今年のぎのわんの綱引き ♪

野嵩のちなひちもうい…7月24日 (日)

大山の綱引き／真志喜の綱引き…7月31日 (日)

✓ 資料を探しています!

宜野湾市史では、資料を探しています。ご自宅に眠る書簡や写真はございませんか?
今や、それらは貴重な資料となっています。もしございましたら、下記の連絡先までご一報ください。

連絡先

宜野湾市教育委員会文化課市史編集係

TEL 098-893-4431 FAX 098-893-4434